

富山市総合計画審議会第2回協働部会 概要

場所：富山市役所議会棟8階 第4委員会室

日時：平成18年2月27日(月)

10:00～11:50

1 開会

2 部会長あいさつ

山西部会長 あいさつ

これまで、各部会における議論が進んできていることから、本日は、各部会での意見の調整と市民と行政の協働の観点からの整理を行いたい。

3 議事

(1) 各部会での協議結果について

(2) 総合計画の体系(案)について

< 概要 >

(部会長) 事務局より、資料についての説明をお願いしたい。

(事務局) 総合計画の体系(案)について説明

(部会長) これまでの検討経過について、各部会長から報告をお願いしたい。

(部会長) 今月中旬に、安心、安全、潤い、活力の4つの部会が開催され、分野ごとの協議が行われたので、その協議結果について報告いただく。

(安心部会、安全部会、潤い部会、活力部会の順に、各部会長より各部会での協議結果を報告した。(報告内容は、第3回各部会の議事録の内容))

(部会長) 各部会での協議結果の報告を受けたが、これについての意見を伺いたい。

(委員) 体系(案)の富山市の立地特性について、「中心市街地の空洞化」と「過疎地域などの人口減少」は全国どこにでもある現象であり、富山市の特性とはいえない。むしろ「県庁所在地であって、富山県としては最大の市街地がある」のように、富山市としてオリジナルな表現に工夫すべきである。

富山市のまちづくりの課題の「5 森林政策」の中でも産業や経済に触れたほうがよいのではないか。

富山県は古くから工業を中心に繁栄してきたという経緯があるが、本計画の施策の名称である「新しい価値を創造する活力のある産業の振興」では既存産

業が見えないのではないか。

まちの賑わいに関して、公共交通を利用してまちに来る人の割合が増えることが賑わいにつながっていく。車を手放せない人ばかりでは、まちの賑わいが創出できないと考える。駐車場が少ないから、まちの賑わいが生まれないという考えは、間違いである。

（部会長） まちの賑わいをつくる仕掛けは別のところにあるということか。

（委員） 富山の人の暮らしに関する特徴的な価値観として、立派な家を建てて高い車に乗ることがいい暮らしであると考え人が多いように思う。大きなショッピングセンターへ行って品物は買うが、小さな飲食店や个性的なお店には足を運ばず、消費しないから、店が育たなく、まちの賑わいもない。富山市に一番足りないものは、これではないかと思う。また、賑わいにつながる、市民がお金を出して盛り上げて楽しむ祭りがなかったことも歴史的な要因の1つと考えられる。

6次産業について、6次とは、1次産業、2次産業、3次産業の掛け算で成立するのであって、どれが欠けてもゼロになってしまうということを意識しなければならない。農山村における農業ビジネスの育成のためには重要なことである。大規模農家は、採算重視の効率化に徹するが、中小農家は、大規模農家が出荷していない様々な場所（店頭）での販売方法等の工夫や、集団でコミュニティを育みながら産業を育成していくなど生計が成り立つ工夫が必要である。

協働について、協働が成り立つためにはNPOなどの組織や、組織内で重要な役割を担う人の存在が不可欠である。富山はNPOの設置数が全国でも低く遅れているのではないか。

富山では、動員に対して極めて協力的であるが、今後は自発的な意志による行動に少しずつシフトしていく必要がある。そのためには地域リーダーの存在も不可欠であり養成していく必要がある。

（委員） 富山は車保有率が全国でも高く、自家用車での移動に依存しているが、環境面での視点から考えても、公共交通の活性化が重要であると考え。公共交通の必要性を考えるにあたって、ヨーロッパでは公共交通に経営黒字を求めるのではなく、税金を投入し維持していくと考える国もある。公共交通へシフトしていく必要性を訴え、車への依存を抑制すべきである。

（委員） 公共交通利用の意識を高めることが重要である。市民にとって公共交通を利用することにより何かメリットになるような仕掛けづくりが大切である。

（委員） 中心商店街の魅力そのものが増えないとインフラ整備が進んでも人は戻ってこない。商業ベースの供給サイドでは経営者が消費者ニーズを常に把握し、人

がほしがる物を探すなどの努力が重要である。産業についての 施策(案)では、供給サイドでのまちづくりばかりではなく、生活者（消費者）の視点に立ったまちづくりも重要である。施策の表現にあたっては生活者の中心のまちづくりを進めるような表現の工夫が必要ではないか。

（委員） まちの中に人の集まりができる仕掛けをつくることが大切でないか。富山は海から山までの範囲に様々な魅力ある資源があり、例えば、それらを地域の人々がまちの中にきて宣伝・活用（販売）することで賑わい創出することができれば、富山はオリジナルがあふれるまちとして魅力が高まり発展していけるのではないか。

（委員） 将来のまちづくりにおいて、コンパクトなまちづくりが最重要課題になるのではないかと考える。歩いて暮らせるまちづくりのため、公共交通の利用やまちの賑わい創出面においても市民意識の高まりが必要である。

施策体系（案）をみると総花的な総合計画になりそうだが、市民一人ひとりにとって自分達が目指すまちづくりが見えるような、市民にとってわかりやすい具体的な将来の姿を見せるべきである。全国どこでもやっていることと、富山市独自の取り組みを分けて考え、都市像をしっかりと考えるべきである。例えば、合併により森林を有する市となり、森林保護に取り組むボランティア団体として設立された「きんたろう倶楽部」には、都市部の市民が大変興味を示し賛同したように、富山市独自の合併の効果を活かした施策の展開が必要である。

公共交通について、その１つである路面電車の今後の整備についても、単に路線を増やすのではなく、高齢者にとって利用しやすい電停の配置など様々な利用者への気配りが必要である。

（部会長） 続いて、協働の観点からの意見をお願いしたい。

（委員） 合併して大きな市になったからといって、県になったわけではない。実際に地域を持ち、市民と接する多くの現場を持っているのだから、総合計画の表現が抽象的になってはいけない。

協働には、機能的なNPOに代表されるネットワーク型の協働と、従来からの地域社会内での全員参加型の協働がある。両者とも重要な協働であり、市として全市民に対して協働を示すには、２つの協働についてリアルな表現が必要である。

（委員） 「平和都市」の推進について、自治体レベルの計画としては、もっと現場がわかる、地域の安全などの具体的なイメージを伝えるべきではないか。

（委員） 富山では、町内会等の地縁組織が強固なためNPOが育ちにくいという現状がある。

総合計画では、従来型の地縁組織の活用と、専門的な活動を担うNPOの活動など、多様な協働の形態を示していく必要がある。

（委員） 強固な地縁社会があるがゆえに、力のある人が地縁組織の下に隠れていることも考えられる。新しい時代の協働に力を発揮できる人を発掘していくことも大切である。

（委員） 行政組織の規模が縮小していく中で、民間委託、民営化、PFIの導入についても、協働と同様に大切な視点であり、これらの成果がわかるような指標の設定が必要となってくる。

（部会長） もう一度、体系（案）について、整理しておきたいのだが。

（委員） 主要課題「6 一体性の確保と均衡ある発展」とあるが、これほど多様な地域を抱えて、それぞれの特徴がある中で、「均衡ある発展」と表現するのは誤解されるおそれがある。市の全ての地域を同じようなまちの姿にするのではなく、街は街らしく、田舎は田舎らしいまちづくりを展開し、発展していくということを明確に示すことが大切である。また、まちをコンパクトにつくることは環境面にもいい影響がある。

（部会長） 次に、「今後のスケジュール」について事務局から説明願います。

（事務局） （3）策定スケジュール（案）について説明

（部会長） 随時の意見募集とあるが、各種団体との懇談会は既に実施したのか。

（事務局） 意見募集については、広報とやま3月20日で、これまでの策定経過について、お知らせするとともにご意見を伺う予定であり、また、各種団体との懇談会については、具体的な内容が告示しできる段階で実施したいと考えている。

（部会長） 5月の協働部会までの間に、構想（案）を策定するのは大変であるとは思いますが、これまでの各部会での意見をできるだけ取り入れていただきたい。
最後になるが、何か意見があればお願いしたい。

（委員） 総合計画のまちづくりの目標に「協働」という言葉を使うのであれば、協働の意味を強力に表現すべきである。

昔のような、同じようなタイプの人達が集まって、力を合せて同じような作業をしてきた「共同」ではなく、違った力を組み合わせて飛躍的に発展する力を生み出すのが今の「協働」である。

行政が、新しい仕組みをつくろうとするときには、新しい発想を持った人と協

力して進めることでうまくいくケースが多い。

総合計画の市民参加の記述にあたっては、「様々なタイプの人が能力を発揮できる場をうまくつくる」ことや「隠れた人材を発掘する」といった視点が必要ではないか。

最近の日本は、単なる娯楽ではなく、半公共的な活動により充実した時間を過ごす活動が育ってきており、成熟社会になってきている。

リアリティのある表現で、それら取り組みを示していく必要がある。

（委員） 「大きい市では出来ない」ということではなく、できるところから取り組んでいかなければならない。

（委員） 協働をしっかりと進めるには具体的にどうすべきかわかりにくい面が多いが、熱心な行政マンがいて、初めて新たな取り組みが動き出していく。行政職員の資質が問われるとともに、熱意のある行政マンを応援する仕組みも必要ではないか。行政職員自らがまちの取り組みの中に入りこんでいくことが重要である。

（委員） 「効率的な行財政運営」、「行政サービスの向上」等の視点だけでなく、行政側における協働の取り組みについても、計画に掲げていく必要がある。

（委員） 協働の要は、自治体職員が担う。協働について、専門的に学習・実践するセッションも必要ではないか。

（委員） 合併により、市内に複数の大学を有することとなったことから、「学生パワーの活用」についても、記述が必要ではないか。

（部会長） 最後に「地域別ワークショップ」の結果について事務局から報告願います。

（事務局） 富山市企画調整課長から「地域別ワークショップ」の結果説明

（委員） 各地域から様々な意見を出し合うことにより、意見の広がりを得ることができる。他の会合に出席して思うことがあるが、地域の枠にとらわれずに、遠慮なく発言することが大事なのではないか。

（部会長） これで、第2回の協働部会の議論を終えたいと思う。貴重な意見を多数頂いたことから、今後の策定作業に役立てていただきたい。

（以上）